

五輪の顔へ変貌

新国立競技場を定点観測65回

開幕まで2年を切った2020年東京五輪・パラリンピック。各競技会場の建設が進む中、東洋学園大(文京区)の学生らが、メインスタジアムとなる新国立競技場(新宿区)を定点観測する写真を撮り続けている。平成28年に開始した撮影はこれまで65回を数えた。本番に向けて刻々と変わりゆく姿に学生らは「五輪に自分たちも参加できている」と実感している。(久保まりな)

東洋学園大生ら撮影

渋谷区千駄ヶ谷にある出版社「河出書房新社」の屋上。ここには2週間に1回、東洋学園大学グローバル・コミュニケーション学部現代都市文化ゼミ(泰松範行教授)の3年生が交代で訪れる。周辺の建物や道路などを目印にスマートフォンを構え、真向かいの新国立競技場を撮影する。

同大学による「新国立競技場建設定点観測プロジェクト」は、工事開始前の平成28年5月にスタート。同学部の荻野博司・特任教授が、「五輪に関わる機会をつくり、学生たちにその感動だったり驚きだったりを感じてもらいたい」と始めた。

4年生から3年生にバトンをつなぎながら、現在は泰松教授の3年のゼミ生12人が担当している。プロジェクト開始から、これまでに行った定点観測は65回に上る。記録した写真からは、更地だった場所に徐々にクレーン車が現れ、外壁ができていく過程が見て取れる。競技場はこの夏に全体の4割が出来上がり、当初、学生らが目印

にしていた東京スカイツリー(墨田区)も見えなくなるほどになった。

同ゼミの山崎紗代子さん(23)は、「間近に見る機会

はこれまでなかったが、変わっていく姿にワクワクします」。李尚承さん(21)も、「五輪の歴史に携わっている気がする」と前向きだ。

競技場は来年11月の完成を目指している。大学では完成まで観測を続ける方針。泰松教授は、学生には、自分たちが五輪にどのように関われるのかを考えさせたいとし、「単なる『パラパラ漫画』で終わらせず、東京の街が五輪に向けてどう変わっていくのかも見ていきたい」と話す。

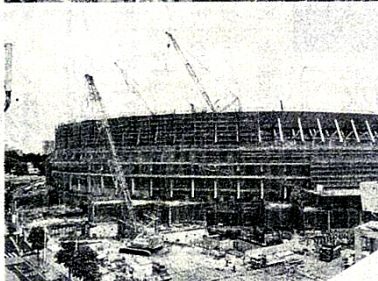
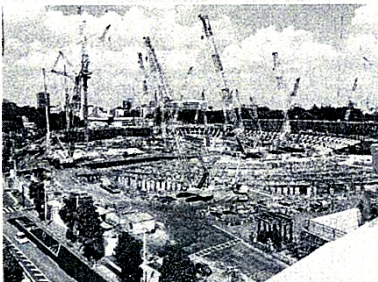
28年7月8日

↓ 29年1月6日

↓ 29年9月14日

↓ 29年12月7日

↓ 30年10月12日



(写真はいずれも東洋学園大提供)

広々とした建設予定地。工事はまだ始まっていない

工事開始の直後。多くのクレーン車が集まっている

クレーンが増え、工事が本格化してきた

工事開始から約1年がたち、外壁ができてきた

工事が進み、最近では外観上の日々の変化は少ない